

(3) 大用中学校

学 校 長 武田 博文
校内研究代表者 谷岡 名津美

1 研究主題 「生徒の思考力・判断力・表現力を高める教育の創造」

(1) 知育

◎教科指導の充実～次期学習指導要領への転換「資質・能力の育成」～

◎継続的かつ計画的な学習姿勢の育成

○授業改善・・・計画的な授業研並びに講師の招聘，学習規律の徹底，ユニバーサルデザインに基づいた授業，教科間連携による授業研究

○個に応じた学習支援・・・各種テストの実施とその結果の活用，補習の充実，教科面談

○家庭学習の充実・・・授業とのサイクル化，家庭との連携

(2) 徳育

◎基本的行動様式の確立及び人権意識の育成～自尊感情の向上～

◎キャリア教育の充実～将来の展望や目標を持った生徒の育成～

○道徳教育の充実・・・道徳参観日の継続，道徳や特活の計画的な実施(全校道徳等)

○定期的な校内支援委員会の実施・・・課題や支援方法の共有，SC,SHL,SSW等の積極的活用

○人間関係力の育成・・・総合的な学習の時間(ふるさと教育)の充実，生徒会活動の充実

(3) 体育

◎基本的生活習慣の確立

◎体力の維持及び向上

○委員会活動の充実・・・定期的な調査及び分析

○部活動の充実・・・朝の体力づくりの継続，地域のクラブとの連携

2 主題設定の理由

全校生徒がわずか14名の小規模校である。素直で真面目な生徒が多いが、幼少の頃より生活を共にしていることから、立場が固定化していたり、馴れ合いの関係になっていたり、立場や場面を考えた言動や社会性に、ここ数年弱さが見られている。そのため、昨年度まで研究主題を「生徒の主体性を伸ばす教育の創造」とし、生徒の自尊感情を高め、自主的で主体的な態度を育む教育活動を目指してきた結果、一定の成果が得られている。

昨年度の取り組みの分析より、学習の定着や活用することにおいて充分とはいえない部分があること、特に語彙が少なく話すことや書くことに弱さが見られることが明らかになっている。そこで、今年度より「生徒の思考力・判断力・表現力を高める教育の創造」と研究主題を変更し、様々な教育活動を仕組んでいくこととした。

3 研究の進め方と方法

主な研究内容

○ 研究授業・公開授業の実施

- ・全員が研究授業を行う。 ・事前協議の強化。(授業力向上のためのチーム会)
- ・道徳の研究授業を学期に1回行なう。

○ 基礎学力の向上に向けての取り組み

- ・学習サイクルの確立 ・夕学習の取り組みと確認 ・NIE活動の取り組み
- ・講師を招聘した研修 ・長期休暇中の学習教室の実施 ・3分間スピーチの継続

○ 大用小学校と連携しての研究協議

- ・小中合同研修会(国語科についての研究) ・小中合同授業参観、授業交流

○ 生徒理解・指導方法の工夫

- ・各アンケート(授業評価など)やテストの分析をもとに、授業・指導の改善へつなげる。
- ・人権主任を中心に、学校生活アンケートやQUの実施、分析を行なう。
- ・生徒情報交換と取り組みを共通認識する。(同じ方向への指導)

4 今年度の主な取り組み

(1) 校内研修

○校内研修の充実

- ・小中連携の校内研を年間5回設定し、授業交流や児童生徒の理解(全国学力学習状況調査及び高知県学力定着状況調査の結果の共有など)に努めた。夏季研修会では、言語技術教育研究会の梶原和美先生(南国市立佐古小学校教頭)をお招きし、問答ゲームの手法等を学習した。
- ・毎回、生徒の情報交換を議題の中に設定し、取り組むべきことを確認した。(個人持ちの生徒理解ファイルを作成。)
- ・研修会で学んだことを情報交換し、指導に生かした。
- ・PDCA サイクルを意識した校内研となるよう計画した。

○授業改善

- ・研究授業の事後協議は西部教育事務所の支援訪問を活用し、全教職員で行った。
- ・学期に1回授業評価を共通して行い、結果を分析し授業の改善点や以後の取り組みを確認することで、授業改善・授業力向上に役立てた。
- ・各教科において、積極的に各種コンクールや検定へ出品、挑戦させることで、授業改善(授業計画や授業の質)へと繋がった。
- ・オンデマンドを活用した総合的な学習の時間の研修を実施した。

(2) 仲間づくり

○人権教育・道徳教育の充実

- ・人権集中プランの実施(6～7月)
- ・人権参観日・道徳参観日(全校道徳)・校内弁論大会の実施
- ・Q-U(年2回)や学校生活アンケート(年3回)の実施と分析

○学校行事

- ・生徒の活動する場面をできるだけ多く設定し、充実感・達成感を味わわせるとともに、場面場面でリーダーの育成を行った。
- ・他との関わりをもつ場面を設定した。(小中連携[NIE]・ふるさと教育・校外での体験学習・蕨岡中との合同修学旅行・4校合同での音楽祭への参加)

(3) 学力の向上

○各授業

- ・発問の工夫をし、生徒主導で行える授業や、意見・考えを言う場面設定を意識した。
- ・授業のめあてを明確にし、振り返りを行うことを徹底した。
- ・少人数授業の研究
- ・授業評価をもとに授業改善を行った。
- ・アクティブラーニングの視点を取り入れた授業
- ・2学期の定期テスト期間中は、7時間目の授業を設定した。

○学習サイクルの確立

- ・授業と家庭学習のサイクル化を図った。(予習と復習)
- ・担任と教科担当で確認し、宿題の未提出者はその日のうちにやり切らすことを徹底した。
- ・生徒理解をもとに個に応じた指導を行った。

○夕学習

- ・基礎学力の向上を目指し、終学活前に10分間学習の時間を設定した。
- ・約2週間ごとに確認テストを行った。合格点を設定し理解できていない場合は加力指導などを行い、合格点に達するようにした。(1,2年:国語 3年:5教科)

○長期休暇中の取り組み

- ・学習教室を設定し、生徒の学びを継続させ、質問に応じやすい環境を整えた。

○NIE活動

- ・切り抜いた新聞記事の感想を書く活動と(NIEノート)、見出しを考える活動を隔週で行った。
- ・学校新聞づくりコンクールへの継続的な参加。

(4) 思考力・判断力・表現力の向上

○NIE 活動及び地域情報誌作り(ふるさと教育)

- ・各学年1～2グループに分け、それぞれが設定したテーマについて地域交流会等で聞き取りを行ったり、各体験からの学びをもとにしたりして新聞を作成した。2学期に開催した小中新聞発表会で優秀賞に選ばれた作品を学校新聞コンクールに応募した。地域情報誌作りも同時進行で行ない、西部印刷の方に御指導をいただきながら2学期に第2号を発行した。

○特別活動の充実

- ・それぞれの活動(専門部, 学級活動等)で役割を持たせ、生徒が活躍できるように仕組んだ。

○生徒朝礼

- ・火曜日に執行部が進行して行っている。
- ・意見を交わしあう場の設定と指導(専門部の発表・3分間スピーチ)

5. 今年度の成果と課題

(1) 成果

- ・昨年度に続き、生徒の主体性の向上に効果的であったと思われる取り組み[小中連携(新聞発表会, 読み聞かせ)、全校道徳、生徒朝礼、月2回の専門部、キャリアシートの活用など]を継続させることができた。
- ・小中合同の校内研を計画通りに実施できた。特に、小中合同で国語科に関する研修を行なえたことは良かった。
- ・指導主事を交えての研究授業を全教員が行うことができ、授業改善につながった。また、事前研の強化をねらいチーム会で指導案検討も実施することができた。
- ・毎回の校内研修や日々の中で、生徒の情報交換を常に行うことにより、全教職員の指導の方向性が定まった。生徒理解ファイルがSHLやSCとの生徒の情報交換に役立った。
- ・全国学力学習定着状況調査において目標値を達成できた。
- ・学校新聞づくりコンクールにおいて、教育長賞に輝いた。
- ・家庭学習については、全生徒が一定量を行なうことができている。また、各生徒に対して教科担任がきめ細やかな指導を行なうことができている。
- ・道徳の教科化への適切な取組が行えた。

(2) 課題

- ・カリキュラムマネジメントを軸にした教育活動の展開。
- ・教科間連携を意識した校内研の実施及び充実。
- ・TPOを考え言動できる生徒の育成。
- ・生徒会活動の計画的な実施とさらなる活性化。
- ・学力が定着しづらい生徒や更に力を伸ばしたい生徒への効果的な指導方法の研究。

今年度研究主題を変更したが、教育活動自体に大幅な変更がなかった為、学校全体に研究主題の転換の意味が浸透していなかったように思い反省する。「思考力・判断力・表現力の向上」と銘を打っても、昨年度まで目指していた「表現力の向上」のみに焦点を当てた形での研究推進となった。3つの力を同時に高めることが難しいのなら、絞る必要もあると感じる。

しかし、四万十市一校一役指定事業「ふるさと教育」の3年目であった今年度に、6年前から取り組んできたNIE教育の大きな柱である新聞作成の取組が、学校新聞づくりコンクールにおいて教育長賞という最優秀賞に輝いたことは、大きな成果であり喜びである。学校や生徒に合った取組をワンチームで地道に継続していくことで、学校独自の取組となり、確実にどんな生徒にでも力を付けることができるということの一つの証拠となった。もちろん、この成果には小学校での取組が大きく影響している。この場を借りて、大用小学校の教職員の皆様や、教育活動を支えてくださっている地域の方々に感謝申し上げたい。